

TEN

英語教師のための情報誌

Vol.43
FALL 2019

TEACHING ENGLISH NOW



特集

授業づくりに生かしたい 「主体的・対話的で深い学び」の視点

巻頭エッセイ

表紙裏 “Walk, Don't Run” (急がば廻れ) 箕星 太郎

特集 授業づくりに生かしたい「主体的・対話的で深い学び」の視点

- 01 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて 津久井 貴之
- 04 5つの領域別実践例
 - 聞くこと 谷口 友隆
 - 読むこと 鈴木 佐榮子
 - 話すこと[やり取り] 堂本 佳樹
 - 話すこと[発表] 今西 竜也
 - 書くこと 神谷 公絵

連載

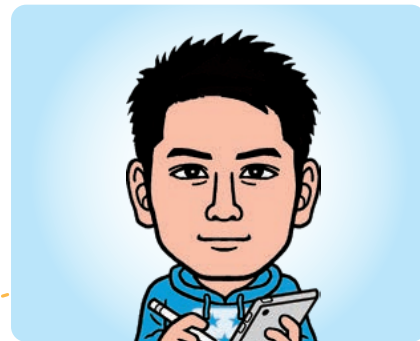
- 09 Essay “Haud Yer Wheesht!” Cameron Blain
- 09 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 Contradictory ideas go well together 巨理 陽一
- 10 実践 NEW CROWN -わたしの授業紹介- 中島 真紀子
- 12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 根岸 雅史
- 13 TEN通信 教育Webコラムのお知らせ

SANSEIDO

“Walk, Don't Run”

(急がば廻れ)

箕星 太朗 Minoboshi Taro



2015年からフリーでゲーム企画、漫画、さまざまなジャンルのキャラクターデザイン、イラストレーションを担当。代表作は『ときめきメモリアル』シリーズ、『ラブプラス』、『めがみめぐり』、『ルートレター』など多数。

もう絵が描けないかもしれない。

それでも『絶望』は古い世界の出口であり、新しい世界への入り口である
振り返ってみるとそう思います。

思い返せば子どもの頃、チラシの裏に落書きをしながら「漫画家になりたい! アニメーターになりたい!」そんな子どもらしい夢を見ていました。

自分は小学校の頃から学校が嫌いで、「中学校を卒業したら絵を描く仕事をするから進学はしない!」と親や先生に宣言していました。義務教育を終えたあとも学校生活を続けるなんて、「地獄へ行け!」と言われていたのと同じ心境でした。

しかし実際問題、デザインの学校へ行くとなると最低でも高卒資格は必要だと理解し、泣く泣く進学しました。

今振り返っても、「学生時代に戻りたい!」などと思うことは一切ありません。

しかしそんな思いがあったからこそ、のちにゲーム業界に入って、高校を舞台に楽しい「学校生活」を過ごすゲームを作ったのかもしれません。

そして苦しい高校の3年間が過ぎ卒業となると、次は進学か就職かの岐路に立たされます。そんな中、思わぬ事故で右手首を切ってしまい、物を握れなくなってしまい

ました。さすがにそのときは「絵を描く仕事への希望が絶たれた!」と絶望しましたが、天性の楽観的な性格のおかげで「**右がダメなら左で描いたらいいや!**」とその日から夢中で左手で描く練習をしました。

そのおかげかどうかはわかりませんが、**いまだかつてアイデアが行き詰まるといった経験がなく、没になっても落ち込まずに何度もアイデアを出せる対応力が身につきました。**

事故から2年間は将来に希望もなく、もがき苦しみました。ありがたいことに右手の親指、人さし指は動くようになったので、右手で物を描くことができるようになりました。

そんな時に、あるご縁でデザイン事務所へ就職できました。広告デザインという仕事です。一時はペンさえ握れなくなった自分にとって、これでお金を頂けることが幸せでした。

デザインで自分の描いたイラストを使うこともあり、いつの日かはイラストで食べていきたいと思うようになった時、雑誌の広告でゲームデザイナーという職業があることを知りました。

普通の作品では経験者に劣ると思い、広告の仕事で培ったDTPを生かしてゲーム雑誌を作り、採用試験に持っていきました。その中でイラスト、ユーザーインターフェースデザイン、企画構成力を判断してもらえと思ったからです。

そのおかげで「ちょっと変わった人材」としてゲーム会社に就職でき、いつの間にかベテランとして、現在もゲームデザイナーで頑張っている次第です。

いつも周り比べて周回遅れの苦しい人生でしたが、その回り道で得た知識や経験、人との出会いが現在の自分の源になっているのだと改めて思います。

苦しい時期こそ将来に悲観せず、回り道でも途中でいろいろな景色を楽しみながら進んだ先には、必ず新しい将来が待っているものと自分は信じています。例えば、あの事故があったからこそ、このエッセイを書くネタにも困らないということです。

苦しい経験こそ財産に変えて、のちのち利益として取り戻さないともったいないですね!



Gateboxのイラスト制作風景



代表作/カプコン『めがみめぐり』
©CAPCOM CO., LTD. 2016 ALL RIGHTS RESERVED.



愛犬コジローとスズマルも作品中に隠しキャラとして登場

授業づくりに生かしたい

「主体的・対話的で深い学び」 の視点

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。

では、その視点をどのように日々の授業づくりに生かしたらよいのでしょうか。

本特集では、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」それぞれについて、授業場面や活動における指導・支援の方法を津久井貴之先生に解説いただきます。また、谷口友隆先生・鈴木佐栄子先生・堂本佳樹先生・今西竜也先生・神谷公絵先生に5つの領域別実践例を紹介いただきます。

① 総論：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて（津久井 貴之）

② 5つの領域別実践例：聞くこと（谷口 友隆）／読むこと（鈴木 佐栄子）／話すこと[やり取り]（堂本 佳樹）
話すこと[発表]（今西 竜也）／書くこと（神谷 公絵）

「主体的・対話的で深い学び」 の実現に向けて

津久井 貴之（お茶の水女子大学附属高等学校）



「主体的・対話的で深い学び」を
実現させるのは何のためか

現在、全国各地で移行措置への対応や新学習指導要領が求める力の育成に向けた実践が行われている。今回の改訂では、小・中・高等学校をとおして育成すべき資質・能力として、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養^{かん}をかかげている。「生きて働くことのない知識・技能」や「未知

の状況には対応できない思考力・判断力・表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとしない学びに向かう力・人間性等」は、自己矛盾していて奇妙に聞こえるが、これまで「この奇妙な現象や学び（と呼べないような学び）」が英語の授業や指導で行われていなかっただろうか。「主体的・対話的で深い学び」の実現を、これまでの授業や指導上の課題を振り返り、質を高めていくための授業改善の視点として捉え、地に

足のついた実践を積み重ねていきたい。もちろん、これまでの授業の中にもそうした「学び」が実現していた場面や学習過程、言語活動があるはずだ。私たち英語教員には、それも含めて検証し、より明示的に、新しい時代を生きていく生徒たちが必要とする資質や能力を身に付けられる授業をつくるのが求められる。

また、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善は、小・中・高等学校の授業に一貫した授業の在り方や指導理念、志向性をもたらしてくれるはずだ。このことにより、児童・生徒は、今まで以上に効果的な英語学習の機会や将来にわたる学びのきっかけ、学び方のヒントを得られるようになるはずである。

次項からは、授業場面や活動における指導・支援の具体などに触れ、それぞれの「学び」について詳しく見ていきたい。



「主体的な学び」を促す指導・支援のポイント

①目標設定・振り返り・再チャレンジの学習過程の導入

まず生徒には、具体的な姿やパフォーマンスを目標としてイメージさせたい。例えば、過年度の先輩や卒業生の言語活動の取り組みの様子を録画し、それを視聴させるなどすれば、CAN-DOリストに書かれた文言が具体的な到達目標として生徒に理解されるだろう。その後、生徒自身の言葉で目標を設定させるなどしてもよいだろう。その際は、達成可能(achievable)で、達成度を評価することができ(measurable)、達成する価値があると思える(valuable)目標を生徒自身が設定できるよう支援することが、その後の主体的な学びのカギとなる。

また、自ら学習や活動のまとめを行ったり、振り返りを行ったりする学習過程を意図的に授業の中に取り入れたい。例えば、英語で即興的にやり取りする力を育てるために言語活動を行う際には、活動の様子を記録した音声や動画を視聴させたり、既習表現の復習や会話の継続・発展のさせ方のモデルを見せるなどの支援を行ったりしながら、生徒たち自身が主体的に自分の課題

やその解決策、場面や状況に応じた英語の表現などに気付くことができるよう支援したい。さらに、状況設定を少し変えるなどして類似の言語活動に再チャレンジする機会を設け、生徒が自身の気付きを生かして主体的に活動に取り組むことで、自分の力の伸びや達成度を実感できる学習過程を取り入れたい。

②学び方を学ぶ機会の設定

「単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うことを目標としている」(『中学校学習指導要領解説 外国語編』, 2018, p.16) とあるように、授業内外を問わず「主体的に」外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるにはどうしたらよいか。

考えられる指導・支援として、まず、言語活動を中心とした授業と家庭学習の連環が挙げられる。授業の予復習を行うことで授業中の言語活動により効果的に取り組むことができたり、言語活動で不十分だった

ことを家庭で復習してより理解が深まる経験や実感を生徒がもてば、予復習も生徒の主体的な学びの場となるだろう。また、教師が家庭学習の内容や方法に選択肢を設け、生徒自身の中から選択して行うなどの工夫をすれば、英語の学び方を学習する機会にもなるだろう。さらに、授業で個々の学び方を共有する機会などを設ければ、徐々に生徒自身が主体的に学び方を選び、多様な学び方を理解するとともに自律的な学習も促すことができるはずだ。また、辞書の活用や教科書本文の音読の仕方など、授業「内」で学び方を指導することで、必要な方法を選択したり自分に合った方法にアレンジしたりすることが可能になる。「主体的な学び」を促すためには系統的・明示的な指導が必要であることにも留意したい。

教師が授業でどのような言語活動や学習を設定するのか、そして家庭でどのような学習を指示・推奨・支援するのかは、子どもたちの英語学習観や英語学習への意欲に大きな影響を与えると考える。再度教師一人ひとりがどのように英語を学びたいかを自問し、生徒の「主体的な学び」を促す指導・支援にあたりたい。



「対話的な学び」を促す指導・支援のポイント

①教師と生徒の対話的な学び

「対話的＝生徒同士の学び合い」と考えがちだが、まず大切なのは、英語を用いた教師と生徒のやり取り(インタラクション)から生徒が学ぶ機会を設けることである。教師が、既習の言語材料を駆使しながら、生徒に身近な話題や教師自身のこと、教科書の題材について英語で語ったり問いかけたりすることで、生徒は英語によるコミュニケーションのモデルを学ぶことになる。教師が音声表現や発問の仕方を工夫し、繰り返しやりキャストなどの指導技術を用いて生徒とやり取りを行うことで、やり取りをしている生徒やそのやり取りを聞いている生徒たちにとって、英語の語彙や文法につい

て学ぶ機会になるはずである。教師にとっても、生徒との英語によるやり取りを大切にすることで、やり取りをとおして語彙や文法、発音に関する生徒の習熟の度合いやリスニングの力、即興的にやり取りをする力などの実態を捉えることができるので、その後の指導や支援のヒントを得ることができるだろう。

②生徒同士の対話的な学び

言語活動を中心に据えた授業であれば、さまざまな場面で「対話的な学び」の機会をつくることができる。ペアやグループで話し合う際にも、ペアを固定せずに頻繁に変えたりグループ編成を工夫したりすること

で、多様な考え方や発想に触れたり、学習内容の理解を深めたりするなど、対話的に学ぶことができる。しかし、単にペア・グループワークを多く取り入れれば「対話的な学び」が起きるわけではない。生徒の思考が促されるように、やり取りや話し合いの場面や状況、タスクなどを明確にし、生徒たちが目的を理解して取り組めるようにしたい。

また、英語でやり取りをしたり話し合ったりすることは、これまで学習過程の最後の活動として行われることが多かったが、英語によるやり取りや話し合いをとおして気付いたり学んだりしたことを次の学習活動や言語活動につなげることが大切である。

例えば、「理想の学校について考えて書く」活動を行うとしよう。教師の説明の後に生徒がブレインストーミングを行い、いきなり書き始めるのではなく、思いついたことや

面白そうなアイデアなどをメモしたうえで、ペアやグループで英語でやり取りを行う言語活動を設定することが考えられる。この「対話的な学び」の後でライティングを行

えば、得た情報を整理したり、他の生徒と自分のアイデアを比較したりしながら英語で表現することになり、「思考力・判断力・表現力等」の育成にもつながる。



「深い学び」を促す指導・支援のポイント

「深い学び」には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」が深く関わる。この見方・考え方とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」（『中学校学習指導要領解説 外国語編』、2018、p.10）であり、これに従えば、言語活動や学習を行う際に「深い学び」を促す条件がいくつか見えてくる。①活動の目的や場面・状況設定があるか、②既習の知識や考え方などを活用することができるか、

③情報や考えの比較や対照、検討・検証する場面があるか、④自分の考えを整理・再構成したり、目的や場面、状況に応じて英語の表現方法を選択し、英文の構成・展開を考えたりする場面があるか。これら全ての条件を満たす必要はないが、特に「深い学び」には1時間や1つの言語活動の計画だけではなく、1単元、あるいは複数の単元を見通した指導計画が求められる。

さらに、他教科での学びを生かすという視点も忘れないようにしたい。教科書本文の読み取り一つとっても、教師の発問を工夫することで深い学びを促すことはできる。前のパートや別の機会に読んだ英

文の情報、他教科の学習内容を活用して内容を推測する発問や、読んだり聞いたりの英文の文脈や状況を踏まえて考えや意見を答える「推論発問」などが考えられる。

「深い学び」によって得られた達成感や知的好奇心への刺激は、生徒の「主体的な学び」や「対話的な学び」をさらに促すきっかけにもなり、3つの学びは独立して起きるというよりは、同時にまた相乗的に起きるものである。少なくとも単元レベルで見るときには「主体的・対話的で深い学び」が互いに関連しながら行われる授業づくりを心がけたい。



「主体的・対話的で深い学び」を実現するため教師に求められる力

(1) 既習表現を駆使しながら、意図をもって英語でやり取りをする力

生徒の習熟の度合いを見ながら英語を使い分ける力が求められる。指示や説明以外の生徒とのやり取りを積極的に行いたい。

(2) 生徒の学びの様子をよく見て適切なタイミングで適切な支援をする力

生徒主体の学習過程では、教師主導の学習指導よりも生徒の様子をよく見ることが可能になる。「楽しそうだ」、「にぎやかに話している」などの表面的な理解にとどまらず、指導のねらいや活動の到達目標に沿った学びになっているかを見極め、必要に応じて全体への働きかけや個別支援を行えるようにしたい。

(3) 単元・年間の中長期的な指導計画を立案する力

教科書どおりにページをなぞるのではなく、単元で扱われているトピックや題材の特徴を理解し、設定した言語活動や指導のねらいに応じた単元を構成する力を伸ばしたい。単元の扱い方の軽重などは中長期的に年間、あるいは3年間を見通して考える必要がある。英語科教員全員の協働的な検討や教科経営も求められる。

(4) 他教科や学校外の人と関わる力

他教科の学びの様子を知らなければ、他教科の学習を活用した「深い学び」は実現できない。何か難しい力を付ける、というよりは、他教科の教員と生徒の様子や

授業の取り組み、工夫などについてちょっとした時間でもやり取りできるとよい。

冒頭でも述べたが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点を大切に、簡単にそれが実現した、または一度実現したから次もできて当然、と思わず粘り強く取り組みたい。特定の学習過程や指導手順、学習形態を授業で取り入れること自体を目的とすることなく、求めている「学び」が起きているかどうか意識を向けて、生徒たちと一緒に少しずつ「主体的・対話的で深い学び」を実現させていきたい。

筆者紹介

津久井 貴之

・群馬大学教育学部・同大学院修了
・お茶の水女子大学附属高等学校教諭



5つの領域別実践例

ここでは、谷口友隆先生・鈴木佐榮子先生・堂本佳樹先生・今西竜也先生・神谷公絵先生に5つの領域別実践例を紹介いただきます。



聞くこと

「主体的・対話的で深い学び」を目指した「聞くこと」の指導



谷口 友隆

(相模原市立大野南中学校)



はじめに

私たちが言葉を聞くときには、何らかの目的があるはずですが、しかしながら、英語の授業では、目的を与えずにただ「聞かせる」指導を時折見かけます。本来受動的である「聞く」という活動を「主体的・対話

的で深い学び」にしていくためには、より能動的に聞かせる工夫をしなければなりません。

そのために私が心がけていることは、単に音声聞かせるだけでなく、生徒が目的

をもって聞くように、「なぜその音声を聞くのか」を明確にすること（これが発問となります）。そして、聞く活動で終わらせず、聞いたことについて書いたり話したりするなど、なるべく他の技能と統合させることです。



発問の工夫 ～主体的で深い学びにつながるリスニングを目指して～

リスニングをする際は、話全体の内容を大きくつかませるのか（概要把握）、数値や時間など細かな情報を聞き取らせるのか（詳細理解）、現実的で、そのテキストタイプにふさわしい発問を選びます。加えて、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、生徒が主体的に「何度も聞きたい」と思えるような魅力的な発問を提示することが大切です。そのためには、単に内容を問うようなものではなく、言葉の裏にある

感情や、一見表面には出てこない行間や場面をくみ取らせるような発問も大切だと考えています。

例えば、次はNEW CROWN 1 Lesson 2 GET 1のテキストです。

Ken: This is a fox. It is from Hokkaido.
Ms Brown: Is that a hawk?
Ken: No, it is not. It is an owl. (以下略)

私が、「なぜブラウン先生はフクロウを『タ

カですか?』と尋ねたのでしょうか。まさか、ブラウン先生がフクロウを知らなかったわけではないと思うんだけど…」と問いかけると、くり返し教科書の音声を聞くうちに、ある生徒が「写真が遠くにあったから見えにくかったんだ」と答えました。実はこの発問には、これといった正解はありませんが、thisとthatの表すところを踏まえて、言葉から場面を想像できたという点でよい答えだと思いました。



他技能との統合 ～対話的なリスニングを目指して～

2年生では、Lesson 6 “My Dream”を生かして、スピーチコンテストを行っています。生徒はそれぞれスピーチ原稿を作成し、練習・暗記して発表に臨みます。生徒のスピーチ発表は、それを聞いている他の生徒のリスニングの教材になります。そして、発表を聞いた直後に、それぞれがスピーチ

に関する感想などのコメントを書き、発表者に渡すという活動を行いました。生徒は、発表者の英語やジェスチャー、写真などの提示物を頼りに、一生懸命に聞いて、よいコメントを書こうとします。以下に実際の生徒のコメントを紹介します。

今回挙げた2つの例のように、リスニン

グにおいても聞いて答え合わせをして終わるのではなく、発問の工夫や他技能との統合によって、生徒の想像力や感性を刺激することで、「主体的・対話的で深い学び」につながると考えています。

発表者が一番伝えたいこと・発表者のメッセージは 11月11日に食べたい

発表者へのメッセージ

I thought that you want to become a soccer player because you play soccer. I never know that you want to become a pastry chef until listening your speech. Your speech was very good!

発表者が一番伝えたいこと・発表者のメッセージは 大阪はいいぞ

発表者へのメッセージ

Your speech was interesting! because I have never visited Osaka, but I ate Takoyaki! It's very delicious! I want to eat Takoyaki in Osaka.



読みを深める指導～パラレルなテキストで「型」を習熟させる

鈴木 佐榮子
(新潟市立藤見中学校)



「読むこと」とジャンル準拠指導

新潟市では、「ジャンル準拠指導」の考えに基づき、各領域の指導の手立てとして、「学習タスク」→「練習タスク」→「評価

タスク」という過程を取り入れている。「読むこと」の指導においては、パラレルなテキストにくり返し触れながら、英文の構成

や表現を学ぶことで、テキストタイプに合った読みを深めることを目指している。

学習タスク	練習タスク	評価タスク
ジャンル準拠指導に沿って、状況設定の確認やモデル分析をクラスやペアで行う。	個別に学習タスクとパラレルな課題(モデル文と類似で初見のテキスト)を課し、習熟を図る。	学習・練習タスクとパラレルな課題を、定期テストやパフォーマンステストで出題する。



パラレルな英文をくり返し読む

NEW CROWN 2年 Lesson 6 USE Readの授業で行った実践を紹介する。ここで扱うテキストは、テキストファミリーが「意見文」、テキストタイプが「スピーチ原稿」、話題が「将来の夢」である。このスピーチ原稿を読む活動を、次に続くProject 2「自分の夢を紹介しよう」のwriting活動と統合的に扱った。最終ゴールを「将来の夢について書くこと」とすることで、英文を読む目的がより明確になるからである。

活動の状況設定は次のとおりである。「友だちはどんな夢をもっているのだろうか。クラスで『将来の夢』についてのスピーチを

しよう。そのために、何人かのスピーチ原稿を読んで参考にしよう。」

①「読むこと」の学習タスク

モデル分析を通して、テキストタイプに合った文の構成や表現の理解を図る。まず、USE Readの本文(165語)を使って指導する前に、Project 2で使う「書くこと」のモデル文を読ませる。モデル文は、語数が100語程度で、未習語も少ないため、「読むこと」の導入として生徒にとって容易になる。教科書の1st Reading(キーワードを探す)/2nd Reading(英語のQA)/3rd Reading(日本語の要約文を完成させる)

と同じ型の内容理解の問いを用意し、意見文の読み方をクラス全体で共有する。その中でふれた文の構成や表現をふまえて、次にUSE Readの本文を、クラスやペアで意見交換しながら読ませる。

②「読むこと」の練習タスク

USE Readの本文とパラレルな英文2つとそれぞれの問いを用意し、生徒に一人で読ませる。問いの解答は、スクリーンに英文を映し出ししながら、クラス全体で確認する。このとき、生徒自身に、自分の解答と、解答を導き出すヒントとなった英文について、下線や矢印などを引いて説明させる。



アウトプットの活動と統合的に扱う

③「書くこと」の学習・練習タスク

通常、②のあとは「読むこと」の評価タスクを行うが、今回の実践は統合的な活動のため、「書くこと」のタスクを挟む。

「書くこと」の学習タスクでは、メモから英文を作る課題に取り組ませる。ここでは、①で読んだモデル文が完成する前のmappingのメモを使用する。すでに書き手が伝えたい内容は理解できているので、構成や自己表現で使いそうな表現に注目さ

せやすい。その後、4つのパラレルなメモから英文を書かせ、段々と意見文の型に習熟させる。最後に、生徒自身の夢についてメモを準備させ、スピーチ原稿を書かせる。

④評価タスク

「読むこと」の評価は、練習タスクから多少ダウンサイズしたパラレルな課題文と内容理解の問いを定期テストで出題し、個々の生徒の学習の習熟度を測った。正解率は79.9%と、意見文の読み方はある程

度の習熟が図られたと言える。ただ、未習語などのあいまいな部分があっても最後まで読み進める力が不足している生徒が目立った。今後は、文章に意図的に未習語を入れるなど、生徒の実態に応じて英文のパラレルの度合いを工夫したい。

詳細は割愛するが、「書くこと」の評価も、上記の定期テストで行う(③で書いたスピーチ原稿は、自己表現活動の一環のため、「書くこと」の評価には含めない)。



教科書本文をアレンジ! 主体的、対話的に 取り組む「やり取り」の活動



堂本 佳樹
(兵庫教育大学附属中学校)



本文を活用した「やり取り」の活動

何をもって「主体的」で「対話的」で「深い学び」とするかは、筆者自身も模索中であるが、活動を用意する際は、生徒が課題に対して創造的に取り組み、グループやペアで意見を交わしながら、既習の言語材料を生徒なりに活用できる活動となるように

工夫している。

「話すこと（やり取り）」については、教科書の本文を活用した活動を実践した。対話になっている教科書本文は、短い英文の中にもきちんと場面設定がされているため、「やり取り」の活動につなげやすい。ここでは、

一度導入した本文を再利用し、「誰」が「どんな場面」で「何」について「どう話しているか」という点に着目させ、その文脈をふまえた「別の発話」をグループで考えさせる活動を紹介する。



既習の言語材料を積極的に使わせる

NEW CROWN 2年 Lesson 1 GET

元の教科書の本文は、Paulが春休みにハワイに行き、そこで買ったアロハシャツをKumiに見せている場面である。生徒たちにこの対話の続きを考えさせた。Lesson 1は前学年の復習レッスンのため、1年で学んだことを思い返しながら、対話を考え

るように促した。

右の例は、実際に生徒が考えた対話である。2文目までが教科書本文で、そのあとに、1年Let's Talk 4「買い物しよう」で習った表現を応用したセリフを加えている。

例 Kumi: What did you buy?
Paul: I bought this aloha shirt!
Kumi: Oh, nice. How much is it?
Paul: It's fifteen dollars.
Kumi: Wow.

NEW CROWN 3年 Lesson 2 GET 2

フランス出身のDupontさんがスピーチをしたあとに、Kenが質問する場面である。ここでは、生徒たちに次のように問いかけた。「Kenの質問はこれでよいのだろうか。別の質問を考えて対話を作ってみよう。」この発問を受けて、生徒たちは自然とGET 1の英文を何度も読み返し、Dupontさんのことを深く知ろうとしていた。また、スピー

チの内容や意図をふまえて、どんな質問が適当かグループで意見を述べ合う姿も多くみられた。あるグループは、「GET 1で“I'm interested in Japanese fashion and popular culture.”と言っているのだから、最初から具体的に踏み込んだ質問をした方がよい」と判断し、2年で学習した最上級を使った質問に置き換えていた。

例 Ken: What Japanese manga do you like the best?
Ms Dupont: I like Sailor Moon the best. I often read it when I was your age.
Ken: Cool.



相手意識をもった発話につなげる

教科書の本文を扱う際は、ターゲット文や語彙の導入が主となるが、「やり取り」の活動であればその制限はなくなる。文脈や発話者の意図を意識しながら、本文の内容をふくらませる活動を積み重ねることで、いずれ生徒自身が自由に「やり取り」を行う際に、相手意識をもって発話するようになる。そのため、この活動では、内容の正

確さよりも、対話の流れに即した、適切な表現が用いられているか、また、グループで協力しながら、積極的に課題を遂行しているか、ということに重点を置いて評価する。

ここで紹介した具体例は、1つ目が前任校で取り組んだもの、2つ目が現任校で取り組んだものである。学年は異なるが、公立中学校でも、大学附属の中学校でも、

生徒たちは互いに意見を述べ合いながら、趣向を凝らして対話を作っていた。

最後は各グループに、自分たちが考えた対話を発表させる。発表の際に、「聞き手」の生徒たちが対話の文脈についていけない場面もあったため、今後は、初めてその対話を聞く人にも内容が伝わるか、という点も意識して取り組ませたい。



聞き手とつながる発表活動

今西 竜也

(京都教育大学附属京都小中学校)



みんなが楽しめる調査と発表をしよう

昨年、私の授業では、NEW CROWN 2 Lesson 7 USE Speak「プレゼンテーションをしよう」において、それぞれが自由にテーマを選んで調査をし、グラフを用いて発表する活動を行いました。USE Readまでの学習で、十分に比較表現を使えるようになってから発表の活動に入り、まずはモ

デルであるプレゼンテーションのスク립トとグラフを見て、トピック、Opening・Body・Closingの構成を確認しました。モデルでは、グラフが示されていることで内容が理解しやすいこと、また、結果を述べるだけではなく、結果から得られた自分の分析が示されていることに特に着目しました。

発表といえば、なんだか一方的で、ともしれば聞いている人はつまらなく感じてしまうかもしれませんが、話し手も聞き手も楽しく、コミュニケーションとして、主体的・対話的な活動にしたい—そのような意識のもと、生徒に活動を与える際は、以下の2つの点を特に工夫しました。



工夫①「聞き手」を意識したテーマ選択

テーマを選ぶ時の条件はただ1つ「聞いている人が楽しい、面白いと感じる内容」です。その心は、発表活動であっても、コミュニケーションであってほしいという願いからです。

モデルを参考に「好きな教科」や「好きな芸能人」をテーマとするだけでは、聞いている人を満足させることは難しいかもしれません。クラスで人気の教科はなんとなく想像できてしまうし、芸能人は選択肢が多すぎてまとめることが難しいからです。多くの生徒が、自分と同じ年齢の人が面白いと思うことは何だろう、最近流行りのトピックはなんだろう、という悩んでいました。

しかし、そこはさすが中学生。大人よりも柔軟でユニークな想像力があります。教科書で示されているプレゼンテーションや私が提示した例なんかよりも面白いテーマで溢れました。「一番好きなパン」「おいしいおにぎりの具」「旅行してみたい国」「韓国アイドルグループのお気に入りメンバー」「好きだった小学校の給食」など、みんなの興味をそそるテーマがたくさん出てきました(恐ろしいので「好きな先生」の調査は却下しました)。また、それぞれ生徒の個性とテーマがマッチしていたことも、楽しい発表につながっていました。

それぞれが聞き手に伝えたいこと、聞き

手が興味を持つ内容を真剣に考えた結果、調査では自分のクラスだけでなく、休み時間を使って他のクラスの生徒にも聞きに行き、より大きなデータを集めた生徒もいました。グラフの塗り分けなどで、見やすくするための工夫もできました。発表活動に積極的に取り組み、コミュニケーション手段として捉えている証拠と感じました。



工夫②「聞き手」とコミュニケーションをとりながらの発表

せっかく頑張って準備してきたのに、いざ発表の段階で、話し手が原稿を丸暗記したものを暗唱テストのように読み上げたり、みんなの前で紙に書いた原稿を音読したりするのは、話し手も聞き手もつまらなく感じてしまいます。まず話し手に意識してほしいのは、クラスメイトに話しているということです。聞き手は同世代で、普段気軽に話せる相手ばかりです。今回の発表活動では、

Openingの部分で、調査でした質問を再度尋ねて答えてもらったり、1位は何かを予想してもらったりして、聞き手との対話を推奨しました。また下を向いて話していると聞き手の顔が見えませんが、原稿やメモを持って話してもいいのですが、声を出すときは必ず顔を上げ、聞き手の方を向いて話するように促しました。

聞き手にも大きな仕事があります。それ

は発表を聞きながら、意思を示すこと。ウンウンとうなずいてみたり、分かりにくいところで顔をしかめてみたり、首をかしげたりと、話し手とのコミュニケーションを図ります。よい聞き手がたくさんいると、一人で話していても、みんなと対話をしながら発表することになり、より深い意味が生まれるのではないのでしょうか。



質の高い言語活動を展開するための 主体的な学びを促進する授業の創造

神谷 公絵
(浜松市立西部中学校)



Projectにつながる質の高い言語活動を展開するために

生徒たちの学びをより主体的なものにするために、NEW CROWN (以下NC) のLessonとまとめのProject活動の構成を生かし、authenticとpersonalizeをキー

ワードに、4技能5領域を総合的及び統合的に結び付けた授業実践に取り組んでいる。教科書本文を基盤とした質の高い言語活動は、生徒たちの知的好奇心を刺激し、

主体的・協働的な学びを促進する原動力となる。以下、「書くこと」に焦点を当てた授業の一端を紹介する。



NC 1, Project 1「自己紹介をしよう」につながる「書くこと」の実践

英語によるコミュニケーション能力を着実に育む英語授業を展開するために、本課に入る前に取り組むGet Readyでは、小学校の外国語活動で体験してきた学習内容と、Lesson 1-3で習得すべき言語材料や自己紹介で使用すると想定される内容を意図的に盛り込み、「話すこと」から「書くこと」へとつなぐ活動を取り入れた。例えば、p.8のスポーツであれば、キーワードゲームを行ってから、A: I play tennis. How about you? / B: I play baseball.と、会話活動を行い、相手が話した内容を主語をIにした英文でノートに書いていく。pp.9-11の食べ物・果物・動物においても、タッチングゲームなどを行ってから、動詞をlikeにして同様の活動を行った。果物や動物にsやesが付いていることに疑問を感じた生徒も少なからずいたが、絵に注目させることで意味に気づき、意識して英文を書く姿が見られた。

Lesson 1-3でも同様に、「話すこと」から「書くこと」へという原則に則り、実際のコミュニケーションの場で使用すると想

定される内容を盛り込んだ「アレンジ会話」で話すことに十分慣れ親しませてから、ペアでの英作文に挑戦した。

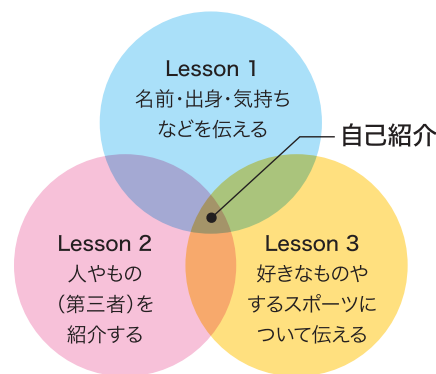
まずLesson 1では、教科書本文を自分やペアの相手の名前や出身、気持ちなどに置き換えた対話活動を行うことで、自己理解と他者理解を促進した。また、何度もペアを変えて活動を行い、その都度、話した内容を英文で書くように促したため、教科書を見ないで英文を書いたり、教科書の続編を書いたりする生徒が見られた。

Lesson 2では、自分が描いた絵を用いて、好きな人や動物などについて話す対話活動を行った後、好きな人や動物の紹介文を書く活動に取り組んだ。自分が描いた絵を使うことで、積極的に相手と話したり、英文を書いたりする姿が見られた。

一般動詞が導入されるLesson 3では、まず、好きなものの紹介のしかたを学び、自分の宝物を紹介し合う対話活動を行った。その後、教科書本文の流れに沿って自分の宝物を紹介する英文(5文)を書いたり、教科書本文の展開を生かし、テーマを

変えて対話文(4文)を書いたりする活動に取り組んだ。

上記の実践に系統立てて取り組むことで、Project 1「自己紹介をしよう」では、10文の自己紹介文を作成することを最終目標とした。また、Projectで書いた英文は、「文化発表会で掲示し、集団の前で発表する」ことも事前に伝えておいた。活動の目的意識と相手意識を相乗的に高めることができたことで、生徒たちは主体的に課題に取り組み、全ての生徒が疑問文を含んだ自己紹介文を完成させることができた。

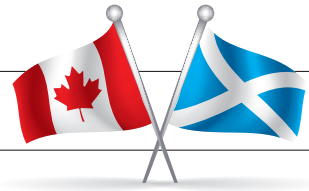


最後に

次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業を見直し、コミュニケーションを図る資質・能力を育

成することが目標として示されている。これらのことを見据えて、次世代を担うグローバルな社会を生きる目の前の生徒たちのた

めに何ができるか、常に念頭に置いて授業実践に取り組んでいきたい。



Cameron Blain (Myojo Gakuen Elementary School)

I am a ‘Canuck’ — Canadian born and bred. I love maple syrup on my pancakes, I grew up watching hockey every Saturday night, and I use ‘eh?’ at the end of my sentences about as often as Japanese people use ‘ne?’

My father, on the other hand, came to Canada from Scotland when he was 26 years old. He was an engineer, fresh with ‘papers’ (the equivalent to an engineering degree in those days), and of course he had a cool Scottish accent.

Growing up with my father, I understood every word he said. I had been exposed to his accent from the day I was born, but my friends often found him very difficult to understand.

Ironically, the tables were turned when my grandfather came to visit us from Scotland. While my father, over the years, had internationalized his English somewhat, his father had spent all his time in the old country.

For example, my grandfather used to tell me, “Haud yer wheesht!” when I was too loud and he was trying to watch the evening news. This, I quickly learned, meant, ‘Be quiet!’ Or after

dinner he’d say, “That’s well tidy scran.” which meant he thought the meal was delicious. In any case, it took years of meeting and talking to my grandpa before I could confidently communicate with him.

There are around 160 distinct English dialects and an array of accents that span every corner of the globe. The way a person speaks English and the words they choose may be similar between continents, or different between villages less than an hour’s walk apart. Despite it being an ‘international language’, these differences can be a problem for both native English speakers and students of English alike.

Whether you are a teacher or a student of English, being proactive is the key. Follow the news on any of the hundreds of news sites that use English. Listen to podcasts from around the world. Watch videos in English made by anyone, native speaker or not. The basic rule of learning always applies: The more you do it, the easier it becomes.

NATTOKU!

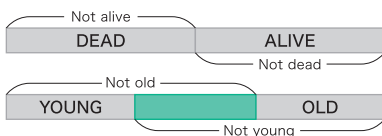
5

リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (静岡大学)

Contradictory ideas go well together



肯定文に対する添え物のように見える否定表現だが、実は奥が深い。程度を尋ねたり比較表現で比べたりする条件として第3回で説明した「0か1の関係」か「度合いがある」という形容詞の性質の違いは、否定表現を理解する上でも重要な意味をもっている。0か1の関係を示す場合、私がゾンビ化しているのであれば、He is **alive and dead**. も He is **neither alive nor dead**. も矛盾した表現となる。ハムレットは“To be, or not to be” だからこそ悩んだのであって、第三の道が見つかったら悲劇は生まれていない。一方、度合いがある表現の場合、He is **young and old**. とは言えないが He is **neither young nor old**. とは言える。年齢の尺度上にはどちらでもない中間領域があるからだ (実際、上の表現はクロスワードパズルで“middle-aged”のヒントとしてよく用いられる)。両関係の違いは、以下のように図示できる。



したがって、NEW CROWN(以下NC)で、久美がエマの家に電話した際 (NC2, p.81), (父親が彼女の所在を把握していないという可能性

もあるが)事実としてエマは家にいるかいないかのどちらかであり、「半分ぐらい家にいる」ということはありえない。父親の “She **isn't** home yet.” という返答の意味は、She is **out** now. ということである。他方、“Are you **hungry**?” と聞かれて “No, I’m **not hungry**.” という時 (NC1, p.25), 必ずしも I’m **full**. (満腹だ) ということの意味するわけではない。The Tale of Peter Rabbit において語り手は、“Flopsy, Mopsy and Cotton-tail were **good** rabbits. Peter was **not**.” (NC2, p.17) と a good rabbit であることは否定しているが、彼が a bad rabbit だと断定しているわけではない。

形容詞の意味に度合いがあることを踏まえると、第2回で触れた as ... as ... の否定文の意味・用法はより理解しやすくなる。表している相対的關係は同じだとしても、He is **older than** I thought. と old が指し示す範囲で表現するより、He is **not as young as** I thought. と言ったほうが、not young の覆う広い領域に解釈を預けられる分(相手が older と言われるのを気にするとすれば)穏当な言い方となるわけだ。

反意形容詞の性質の理解とあわせて、not A という否定表現の理解には、文脈において対応する肯定の表現Aを把握することが欠かせな

い。直前の発言であれ聞き手の想定であれ、それが not の否定の対象だからである。例えばゾルバは、ラッキーの “Mommy.” という発言を受けて “I’m **not** your mommy.” と否定し、彼女の I am a cat. という想定を否定して “You’re **not** a cat.” と諭している (NC2, pp.117-118)。同様に、“She **isn't** home yet.” は、“Is Emma in?” に含まれる久美の She is home now. という想定に対する否定である。

“There’s **no** club meeting tomorrow morning.” という久美のエマへの伝言も、明朝ミーティングがあるというエマの想定に対する否定である。この場合、問題はミーティングの有無なので There **isn't any** club meeting ... と言っても違いはほとんどないが、no は、数量や程度がゼロだと伝えることに力点がある。このことは、用例をおとしておきおきたい(織田稔『英文法学習の基礎』研究社、1990, p.38)。度合いがある表現であれば、例えば Peter was **not good**. と Peter was **no good**. とで、語り手の Peter Rabbit に対する評価が大きく異なることがわかる。そして両者の違いはのちのち、**not more/less than ...**, **no more/less than ...** といった、厄介物扱いされる表現の意味を理屈で納得することにつながっているのだ。

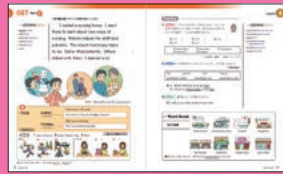
筑波大学附属中学校

中島 真紀子先生



本時の授業

Book 2 Lesson 6
2時間目
(GET Part 2)



◆授業を考える時に大切にしていること

- ①教科書をオーソドックスに活用しながらも、授業自体を実際のコミュニケーションの場とすることを意識して授業作りを行っています。
- ②前時の復習、新出文法の導入、内容理解、音読練習等慣れ親しんだ活動を大切に、基礎・基本から丁寧に指導することを心がけています。
- ③最初に提示したねらいに向かわせるのではなく、授業が終わったときに生徒自身が学びに気づき、自然とねらいを達成しているよう組み立てています。また、生徒自身が授業前後の変化や成長を少しでも感じられる授業を目指しています。

授業紹介

授業
開始

① Greeting, 前時の振り返り(10分)

前時(GET Part 1)は、本文読解を通して健の将来の夢を理解し、「自分だったら何がしたいか」を考え、ペアで共有しました。本時は、GET Part 1の新出単語の確認、音読練習、質疑応答を通した本文の振り返りをしながら、もう一度ペアで自分のやりたいことを共有することから始めます。

②新出文法の導入(15分),ドリル練習(7分)

(1)教科書本文の内容をきっかけとし、他の教科の教師の中学生時代の将来の夢、授業者の経験へとつながる話を聞かせます。その際、生徒の想像をかきたて、発話を促し、インプットからインタラクションへつなげることを意識しています。

Script

T: You talked about your dream for the future. What about your teachers' dream at this school? What did your teachers want to be or want to do when they were junior high school students? Mr. Suzuki, your math teacher, wanted to be a math teacher when he was a junior high school student. His dream came true! What about Ms. Yamada? Can you guess?

Ss: P.E. teacher? Newscaster? Dancer...?

T: Ms. Yamada wanted to be a newscaster. What about me? When I was a junior high school student, I wanted to visit many countries. I wanted to go to Africa someday. This summer, my dream came true! I visited Africa. (Show them a map of Africa.)

(2)アフリカ・ザンビアで出会った中学生の将来の夢、ストリートチルドレンを支援する日本人女性の活動に関するオーラルイントロダクションを通して、不定詞の副詞用法を導入します。その後、副詞用法に関して、日本語で短く簡潔に説明を行い、きちんと理解したうえでドリル練習を行います。

Script

T: I visited Zambia in Africa and I met many people there. For example, I met this boy. His name is Willfrid. He wants to be a truck driver. Why? **To help his brother.** His brother is a truck driver. So **he wants to be a truck driver to help his brother.**

T: What about this girl? Her name is Bidy. In the future, she wants to be a nurse. Why? **To help sick people. She wants to be a nurse to help sick people. She is studying hard to be a nurse.**

T: I also met this lady. She is Japanese. Her name is Ouko. She lives in Zambia now. Why did she come to Zambia? **To help street children. She came to Zambia to help street children.** Now she is working hard. Why? **To build them houses. She is working hard to build them houses.**



◆本時のポイント

授業のはじめとおわりに、共通の質問「将来自分がやりたいこと」を投げかけ、本時の学びによる気持ちの変化を実感できるように授業を組み立てました。

授業者の海外での体験やその感想、ザンビアの中学生やアフリカで活躍する日本人女性の考え、そして、日本が抱える問題など、様々な情報を与えることで生徒の視野を広げ、自らのことを振り返り、改めて自分ができること・やりたいことを考えられるように工夫しました。また、教科書本文を理解する際にも、ただ日本語訳をするのではなく、その裏に隠れている登場人物の思いや、それに至る背景まで読み取らせ、自分自身に置き換えて考えられるようにしました。

Lesson 6 指導計画

不定詞を理解し、実際のコミュニケーションで使用できるようになる。自分の将来について、他者との関わりや社会奉仕の観点から考える。

GET (3時間)

▶1時間目

名詞用法を理解し、実際の場面を想定して使用する。
教科書の登場人物(健)の将来の夢を理解し、自分だったら…を考える。

▶2時間目

副詞用法を理解し、実際の場面を想定して使用する。様々な立場の人の考えや、現代日本の問題に触れた後、再度自分の将来について考え、英語で書く。

▶3時間目

Q&A等を通して、GET Part1, 2の復習を行う。
形容詞用法を理解し、実際の場面を想定して使用する。

USE Read (2時間)

文法のまとめ (1時間)

③GET Part 2本文の読解と音読練習 (10分)

はじめに授業者とのやり取りを通して、本文の内容をおおまかに理解します。考える時間をとってから、教科書を開き、健が nursing homeへ行くことにした理由、職場体験プログラムを通して学んだことを読み取ります。その後、日本語での要点の説明、新出単語の確認、本文の音読練習を行いました。

Script (活動開始時)

T: What about Ken? What does he want to be in the future?

S1: He wants to be an engineer in the future.

T: That's right. He wants to be an engineer, but for the day-at-work program, he wants to go to a nursing home. Why?

S2: Because nursing homes use robots these days.

T: Right. He wants to go to a nursing home to learn about new ways of nursing.

④まとめとライティング活動 (8分), Closing

教科書本文の背景にある日本の問題点や健の姿勢を補足し、また、授業前半でも言及したザンビアの事情に再度触れ、日本には日本の問題があり、ザンビアにはザンビアの問題があるということを生徒と確認します。その問題を解決するために人々は「誰かを手伝いたいな、何か自分にできないかな」と考えていることを伝え、授業者が再度、“How about you? What do you want to do?”と問いかけます。友だちとの共有はしないので、感じたままを素直に書いてほしいと伝え、生徒に自分の思いをワークシートに英語で書くように指示しました。

Script

T: Today, I told you about people I met in Zambia and Ken. They want to do something for others. Willfrid wants to do something for his brother. Bidy wants to do something for sick people. Ouko wants to do something for street children. Ken wants to do something for the old people and staff in the nursing home. What about you? What can you do for others? What do you want to do? Please think about it one more time and write it down this time.



授業
終了

■ 授業を終えて

新出文法を導入する場面で、私自身が実際に経験したことや実在する人物を扱うことで、生徒の興味を喚起することができました。今回の教科書の本文は短く単純なものではありますが、深く読み取ると、日本が抱える問題が見えてくるものであり、単に日本語訳をして音読をするというだけでなく、一歩踏み込んで生徒自身が自分のことに落とし込んで考える授業が展開できた

のではないかと、思っています。本時の最後に書いて表現させた文章の中には、家族にしてあげたいことを書いてきた生徒や、実際になりたいと思っている職業について書いてきた生徒もいました。理由まできちんと書くことができている、長い文章ではありませんでしたが内容が濃いものが多く、自然と生徒の中から湧き出てきた思いなのだと感じ、読んでいて嬉しくなりました。

Question

現行の学習指導要領では、4技能を総合的に指導することになり、技能統合についても言及されています。こうした指導に対する評価はどのように行ったらいいのでしょうか。



Answer

技能統合の評価では、複数の技能にまたがる言語活動の評価となります。定期試験では、授業で行った言語活動と平行な言語活動を設定してみましょう。その上で、そのコミュニケーションの目的を達成しているかという観点でも評価してみるといいでしょう。



根岸 雅史(東京外国語大学)

新しい『中学校学習指導要領解説 外国語編』でも「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、読み取ったことや感じたこと、考えたことなどを伝えた上で、相手からの質問に対して適切に回答したり自ら質問し返したりする活動。」というような言語活動の例が挙げられています。これは、いわば「聞くこと」や「読むこと」と「話すこと」を統合的に関連付けた活動です。

技能統合とは、2つ以上の技能が関わる活動であり、魅力的な言語活動となる可能性を秘めています。ただし、2つ以上の技能が関わっていれば、技能統合の言語活動かということ、必ずしもそうでもありません。たとえば、テキストを口頭で要約するretellingは複数技能にまたがる「練習」ではあっても、「言語活動」とは言えません。

ポイントは、新学習指導要領の表現を借りれば、「コミュニケーションの目的・場面・状況に合った言語活動」であることです。たとえば、天気予報を聞いて、今日着ていく服を友達にアドバイスするなどは技能統合の言語活動です。学習指導要領では、「受容技能」と「産出技能」のような組み合わせだけが例示されていますが、「受容技能」同士や「産出技能」

同士の組み合わせもあり得るし、4技能すべての関わるような組み合わせもあり得るでしょう。

では、定期試験における技能統合の評価はどうしたらいいのでしょうか。その評価の基本的な考え方は、指導で行った言語活動と平行なタスクを設定することです。まず、指導と同様に、「コミュニケーションの目的・場面・状況」を設定します。前述の天気予報を用いての技能統合の指導を行ったとしたら、テストでも、別の天気予報を用いて技能統合のタスクを設定します。指導では「着ていく服のアドバイスをする」というタスクでしたが、設定を変えて、「その日の活動のアドバイスをする」というようなタスクに変更することもできるでしょう。これがいわゆる平行なタスクです。

技能統合の評価においては、「文法的正確さ」や「語彙の正確さ」といった言語的な観点の他に、そのコミュニケーションの目的を達成したのかという観点も重要になります。これは達成・未達成という二分法的な評価の他に、その達成の程度に応じて行う段階的な評価もあるでしょう。

現状の観点別評価であれば、「外国語理解の能力」と「外国語表現の能力」を区別して評価しなければならないので、

「受容技能」と「産出技能」が統合している場合は、そのどちらとして評価するかを判断しなければなりません。この場合、関わった複数の技能のうちどれを評価するのかという問題があります。この問題に関しては、少なくとも2つのアプローチがあります。1つは、最終的に用いられている技能を評価するというものです。先ほどの天気予報の例で言えば、最後にアドバイスするので、この評価結果は「外国語表現の能力」として扱います。もう1つの考えは、関わる技能の比重です。技能ごとの比重がかなり異なる場合は、比重の重い技能の方の評価とするというものです。たとえば、テレビの番組予告を聞いて、自分が興味のある番組の開始時間を聞き取ってメモするというものであれば、開始時間をメモするだけでなく、「書くこと」の負担の方はそう大きくないために、この評価結果は「外国語理解の能力」に行くことになるでしょう。

ちなみに、新学習指導要領では、技能統合の評価の結果は、それがどのような技能の組み合わせであれ、「思考・判断・表現」の枠に入ることになるので、悩まずにすむはずです。ただし、技能統合の評価タスクは、結果の解釈が容易でなく、生徒の学習診断には向いているとは言えません。

教育Webコラムのお知らせ

三省堂教科書・教材サイトでは、小学校・中学校・高等学校の先生方へ向けた英語・国語のWebコラムを掲載しています。
最新の教育情報や学校の「今」、これからの教育が目指す方向性など、多彩なテーマを取り上げていますので、ぜひ一度ご覧ください。

中学校・英語のコラム紹介



内容について

大島希巳江先生の連載コラム。
英語落語を通じて見えたグローバル英語のあり方を探ります。

これまで扱ったテーマ

グローバル英語 / Englishes / 言語のグローカル化 / 言語と文化的な価値観 / 言語とアイデンティティなど



内容について

英語教育界ホープの工藤洋路先生・津久井貴之先生が、コーヒー片手に「ゆるっと対談」しています。
トレンドキーワードへの見解を、理論から実践まで幅広く語ります。

これまで扱ったテーマ

新学習指導要領 / ライティング / 言語活動の場面設定 / 教師の英語力向上 / 即興スピーキングなど



内容について

1979年から続いている森住衛先生の連載をウェブで再開。
日英の単語を取り上げ、比較言語文化の視点から、ことばの深さ・広さに迫ります。

これまで扱ったテーマ

words[ことば] / liberal[リベラル] / public[公] / football[サッカー] / sit[すわる]

アクセスは
こちらから



三省堂 コラム 検索

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/column/>



小学校の外国語で役立つ1冊!

担任の先生のための英語表現集

小学校の英語

スマホで聴ける
音声つき

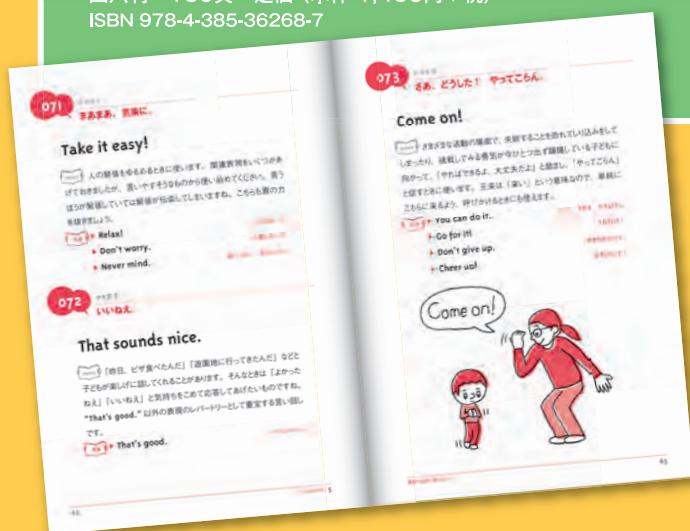
教室で使える基本表現200

〈新版〉 永井淳子・粕谷恭子 [著]

四六判 160頁 定価(本体 1,400円+税)
ISBN 978-4-385-36268-7



小学校での外国語の授業を楽しくす
めていくために必要な基本表現を200
に厳選。活動の中で、自然に英語に触れ
ながら、楽しくコミュニケーションをする
ための1冊です。ALTとの打ち合わせに
役立つフレーズも収録しています。



CONTENTS

Chapter 1

英語を気楽に使ってみよう
(あいさつ・つなぎことばのフレーズ)

Chapter 2

英語で授業をすすめてみよう
(授業の進行・活動の準備のためのフレーズ)

Teacher Talk ① ピクチャーカードを使ってみよう
コラム① まずは気楽に取り組もう

Chapter 3

英語で子どもを動かしてみよう
(活動の中で使う基本フレーズ)

Chapter 4

英語で確かめてみよう
(子どもに確認を求めるフレーズ)

Teacher Talk ② 歌を歌おう
コラム② ティーチャートークのちょっとしたコツ

Chapter 5

英語でほめてあげよう
(子どものやる気を引き出すフレーズ)

Chapter 6

英語で思いっきりしかってみよう
(注意したり、たしなめたりのフレーズ)

Teacher Talk ③ 体を動かそう
コラム③ 歌いながらオニを決めよう

Chapter 7

英語でアクティビティを楽しもう
(活動の中での具体的な指示のフレーズ)

Teacher Talk ④ ジャンボカルタ取りをしよう
コラム④ 知っておきたい学校用語

Chapter 8

英語でゲームを楽しもう
(ゲームの中で子どもを動かすフレーズ)

Chapter 9

英語で子どもとのやりとりを楽しもう
(コミュニケーションを活かすためのフレーズ)

Chapter 10

英語でALTと気楽に話そう
(ALTとの打ち合わせや授業で使えるフレーズ)

Teacher Talk ⑤ パノラマで遊ぼう
コラム⑤ ALTとの授業を積極的に
基本表現リスト

(この商品は「SELF BOOKS 7 小学校の英語 教室で使える基本表現200」の新版です。)

三省堂 教科書・教材サイト

<https://tb.sanseido.co.jp/>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06(6341)2177

■名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052(953)9211

■九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092(531)1531・1532

■札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011(616)8722

三省堂